

スキー板の変遷に伴うロングターン技術の変遷に関する研究

—カービングスキーとその影響に着目して—

学校教育教員養成課程 98-114 安田真理

1. 研究の動機及び目的

スキーは、冬季の野外スポーツとして多くの人々に親しまれてきた。そんなスキースポーツに、近年カービングスキー^{図1)}と呼ばれる、カービングターン^{図2)}をこれまでよりも容易に行えるカービングスキーが登場し、新しい旋風が巻き起こった。カービングターンとは文字通り carve (彫る) する、つまり彫刻刀などで彫るようにスキーのエッジを使い細いシュプールを描くターンのことをいう。

深く絞られたサイドカーブを持つカービングスキーは、従来のノーマルスキーよりも低いスピードでのカービングターンを可能にし、カービング感覚を楽しめるレベルの裾野を広げる役割を果たすことになった。現在、カービングスキーと総称されるスキーの中には、レースカーブからエクストリームカーブまで、さまざまなタイプが含まれている。

カービングスキーが日本の一般市場に登場したのは 1997 年から 1998 年にかけてのシーズンのことで、急速な普及とともに年々改良された。カービングスキーは、ただ“切れるだけのスキー板”から、“多種多様な楽しみ方と性格をもったスキー群へ”と変化し、細分化され始めたのである。しかし、あまりにも急激なカービングスキーの進化に、カービングスキーは情報不足という状況を生んでしまった。カービングスキーが登場して数年経過した現在もなお、カービングスキーそのものと、それに対応したカービングスキー技術の理解が、今ひとつ私たち一般スキーヤーに浸透していないというのが現状である。

そこで、カービングスキーの位置づけ、新しい技術を理解するとともに、自分自身のカービングスキーの楽しみ方を発見することやスキーとの付き合い方を再確認するためにも、カービングスキーがどのように進化し、それにともなってどのように技術も変化してきているのかという、カービングスキーの現状と歴史について明らかにすることにたいへん意義があると考えた。

ことに、本研究では、スキー板の変遷とそれに伴うロングターン技術^{写真1)}の変遷を明らかにする。その中でもとくに、カービングスキーとそれに影響を受けてきたカービングターン技術に焦点をあてて、その変遷を明らかにしていくことを本研究における第一の目的とする。

2. 研究の方法

スキースキの歴史についての文献には、新しいものが少なく、最近のスキースキ史を明らかにした文献を見つけることができなかった。そこで本研究では、技術の変遷を明らかにするにあたり、全日本スキースキ連盟が発刊している、指導者のための指導書『日本スキースキ教程』を参考にする。

しかし、この『日本スキースキ教程』が最後に改定されたのが 1999 年であるため、ごく最近の事情について明らかにすることはできない。そこで、カービングスキースキとカービング技術の変遷を明らかにする際には 35 年間の歴史を誇る雑誌『月刊SKI journal』を使用することとした。このスキースキジャーナルには、技術検証、ニューモデルスキースキテスト、競技結果、スキースキの豆知識など、スキースキに関する多岐にわたる最新の情報が随時掲載されている。これらふたつの参考資料を柱に、変遷をまとめるとともに検討も加えていく。

3. スキースキの起源

スキースキは古代紀元前 2500 年、あるいはそれ以前の神話にさかのぼり、世界各地の遺跡や文献から、雪のある地域に存在したと考えられる。これら古代のスキースキは、いずれも雪上を歩くための「かんじき」の役割を果たすもので、それが次第に縦長の板状のものになり、いくらか滑走の機能をもつことから、スキースキの原型と考えられる。

その後スキースキは、北欧を中心に実用のスキースキ、スポーツとしてのスキースキとして発展していった。とくにスキースキを国技とするノルウェーを中心に北欧全域へと広がり、ジャンプ、クロスカントリー、アルペンと、次第に競技スキースキとして世界各国で親しまれるスポーツへと進化していくのである。

4. カービングスキースキ登場以前の変遷について

カービングスキースキが登場する以前の日本におけるスキースキ板やスキースキ技術は、約 60 年間は北欧に足踏みをあわせたものであった。しかし 1969 年には、日本独自の技術体系や技術を紹介した『SAJスキースキ教程』が発行され、日本のスキースキを確立し始めたといえる。

スキースキ板は、徐々に質の良いものへと改良が進み、それに伴って技術も高度なものへと発達していく。基礎と競技が融合し、とくにスピードを追究できるズレないターン、カービングターンが好まれるようになった。

5. カービングスキー登場後の変遷について

(1) スキー板の特徴

カービングターンが求められ、そういった技術にあわせたスキー板、カービングスキーが改良された。カービングスキーとは、欧米に巻き起こった今話題のスキー道具である。このカービングという名称は一般的に広く使われているが、意味の捉えかたはさまざまなようで、メーカーによって“carving”であったり“curving”を用いていた、その他にも“オーバーサイドカットスキー”、“ニューシェイプスキー”など、各メーカーの開発コンセプトによりさまざまな名称で呼ばれている。本研究では一般に広く使われているカービングという名称で統一した。これらはすべて、長さが短く、サイドカーブに手を加えられたスキーのことをさす。そのスキー板の種類は年々増えていて、競技用、エキスパート用、フリーライド用、オールラウンドなど、さまざまである。

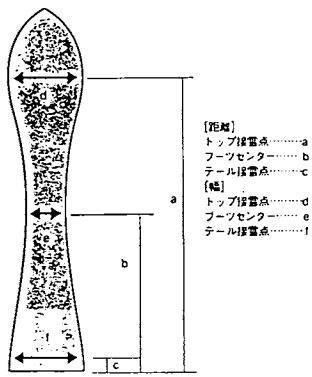
(2) ロングターン技術の特徴

それぞれのスキー板に合わせたターン技術というものが考案され、今だそのターン技術は試行錯誤の段階といえる。ターン技術の大きな特徴は、内傾角^{写真2)}が鋭いこと、外向傾姿勢^{写真3)}やひねり動作が必要ないために、迎え角^{写真3)}が見られないこと、両足荷重、ワイドスタンス、スキー板の左右軸^{図3)}を活用することなどが挙げられる。ここで留意したい点は、これまでのターン技術がなくなったわけではなく、その基本技術に乗っ取って今の新しいスキー板やターン技術が生まれたにすぎないということである。現在は、古い技術はさておき、新しい技術というものが主流となって、進化し続けている状況といえよう。

6. 研究のまとめ

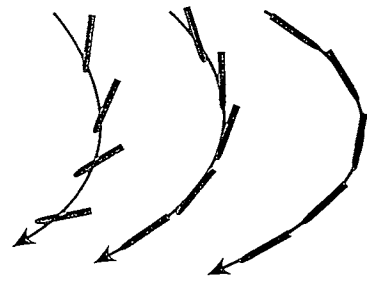
本研究は、変遷を明らかにし、新しいスキーの理解を深め、その楽しみ方を見つけることに意義をもとめた。実際に研究よりわかったことは、下記のとおりである。

- ① スキー板はこれまで人の手によって改良され続けてきたこと。
- ② スキー板とスキー技術は相互に作用し合って発展、進化していくということ。
- ③ スキーヤーは、新しい道具や技術を取り入れる勇気をもつことが大切である。
- ④ 現在のスキー板は、進化の途中であり、今後の発展を予感させるものである。
- ⑤ スキー技術に関しても、試行錯誤の段階であるということ。
- ⑥ 新しい技術は、従来の基本技術にのっとったものであるということ。



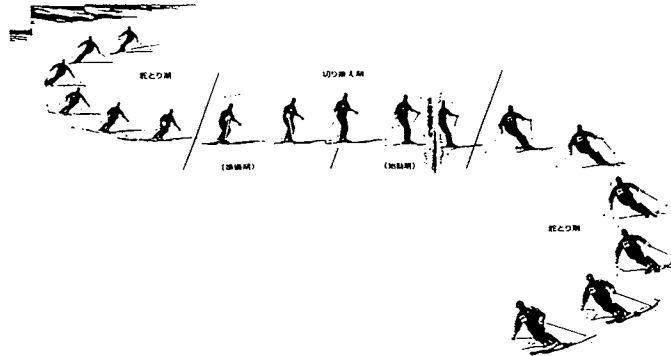
(図1) カービングスキー

スキディング スキディング+カービング カービング

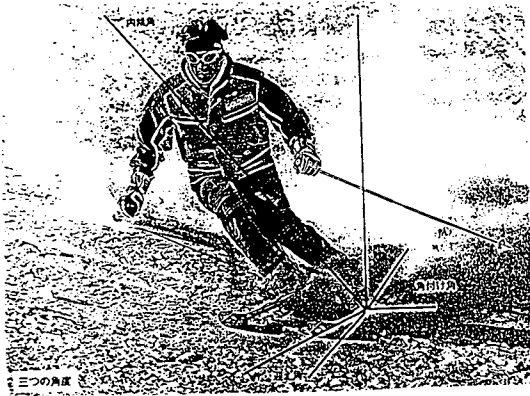


スキディング要素 カービング要素

(図2) カービングターン



(写真1) ロングターン技術⇄ショートターン技術



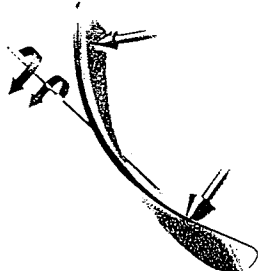
(写真2) 内傾角、迎え角…ひねりの動作によって生じる角



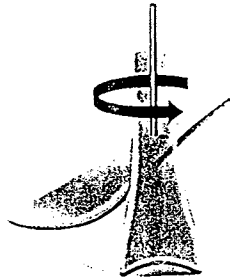
(写真3) 外向傾姿勢…体が外側を向き、外側に傾いている

スキー板の左右軸の回転と役割

ターン中にスキー板と重心の位置関係を前後に変えることによって、スキー板の左右軸が回転し、トップ側やテール側への圧が強められる。ターン後半にスキー板を走らせるには、テール側への圧を強める必要がある。

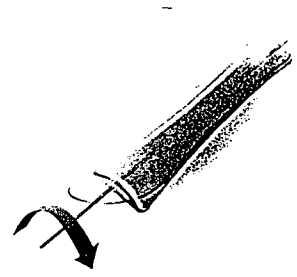


(図3) スキー板の左右軸…スキー板の回転軸のひとつ



スキー板の上下軸の回転と役割

スキー板を左右にまわす回旋動作に関係するのが、スキー板の上下軸の回転。典型的なスキディングターンから、ポジショニング時だけにスキディング要素を使うスキッド&カーブまで、幅広い度合いで使われる動き。



スキー板の前後軸の回転と役割

スキー板の前後軸を回転させる運動は、角づけ角の調節に関係する。上級レベルのスキーヤーの場合、レールターンが行なえることから、この前後軸を回転させる運動の基本は身についていると考えられる。